

五月雨をおつめて早し最上川

象 潟

島は笑ふが如く、象潟は怨むが如し。寂しさに悲しみを加へて、地勢魂を惱ますに似たり。
汐越や鶴脛濡れて海涼し

六、固有の偉大さ

江山水陸の風光敷を盡くして、今象潟に方寸をせむ。酒田の湊より東北の方、山を越え、磯を傳ひ、いさごを踏みて、その際十里。日影や、かななく頃、潮風眞砂を吹き上げ、雨朦朧として鳥海の山隠る。暗中に摸索して、雨もまた奇なりとせば、雨後の晴色また頼もしと、海人の苦屋に膝を入れて、雨の霽るゝを待つ。その朝、天よく晴れて、朝日はなやかにさし出づるほどに、象潟に舟を浮かぶ。先づ、能因島に舟を寄せて、三年幽居の跡をとぶらひ、向かふの岸に舟を上れば、花の上漕ぐと詠まれし櫻の老い木、西行法師の記念を残す。寺を千満珠寺といふ。

この寺の方丈に坐して簾を卷けば、風景一眼のうちには盡きて、南に鳥海天を支へ、その影映りて江にあり。西はむやゝの關路を限り、東に堤を築きて秋田に通ふ道遙かに、海北に構へて渡打ち入る所を汐越といふ。江の縦横一里ばかり、而影松島に通ひて又異なり。松

大地震以後、東京に高層建築の殖えて行つた速度はかなり早かつたといつてよい。毎日その進行を側で見てゐた人たちは、それほどにも感じなかつたであらうが、地方から稀に上京する者には、それが顯著に感ぜられた。おひ／＼高層建築が立ち並ぶに従つて、部分的には堂々とした通事も出来上つて來た。全體としては、恐しく亂雑な、半出來の町でありながら、しかも、どこかに力を感じさせる不思議な都合が出現したのである。

この復興の經過の間に、自分を非常に驚かせたものが一つある。二三年前の初夏、久しぶりに上京して、東京驛から丸の内の高層建築街を抜けて、壕側へ出た時であつた。お壕に面して新しい高層建築が立ち揃つてゐる。こゝがあの荒れ果てた三菱が原であつた時分

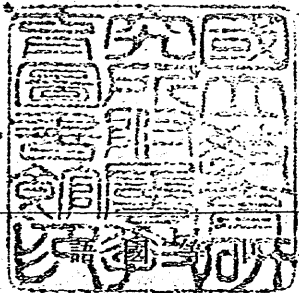
中等國語三

文部省

文部省調査局刊行認許贈

(中) ¥ 1.80

(11)



昭和二十一年七月一日印刷 同日翻刻印刷
昭和二十一年七月五日發行 同日翻刻發行
【中】定價壹圓八拾錢
(昭和二十一年七月五日 文部省検査済)

著作權所有 文 部 省

發行所 東京都神田區岩本町三番地
中等學校教科書株式會社
代表者 加野 庄 吾

印刷者 東京都牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
大日本印刷株式會社
代表者 佐久間長吉郎

APPROVED BY MINISTRY
OF EDUCATION
(DATE Jul. 1, 1946)

發行所 中等學校教科書株式會社

教科書番號 11ノ3

目 録

文 法 篇

〔文語の續き〕

- 一 文語助動詞の接續と活用(一) 一
- 二 文語助動詞の接續と活用(二) 八
- 三 文語助動詞の接續と活用(三) 十三
- 四 文語助動詞の接續と活用(四) 十六
- 五 文語助詞の種類と用法 二十一

附 表

- 第一表 口語及び文語助動詞活用表 三十四
- 第二表 口語及び文語助動詞接續表 三十五
- 第三表 口語及び文語助詞接續表 三十六

漢 文 篇

一 教 學

- 送安井仲平東遊序 教條 示龍場諸生 孝道 諸家家訓
- 勸學文 桂林莊雜詠示諸生

二 史 鑑

伯夷頌 任俠二則 易水送別 蘇武持節 蘇武 以至

三 詞 苑

五柳先生傳 桃花源記 村夜 胡笳歌送顏真卿使赴河隴
黃鶴樓送孟浩然之廣陵 楓橋夜泊 朗詠

四 論 孟 鈔

論語 孟子

十六
二十一



全く隔世の感がある。しかし、自分を驚かされたのは、この立ち並んだ高層建築ではない。これは、さうでなくして、これらの建築に對し、靜かに眠つてゐるやうな、お塚の石垣と和田倉門とが、實に鮮かな印象を以つて自分を驚かせたのである。柔かに枝を垂れてゐる塚側の柳、淀んだお塚の水、さびた石垣の色、さうして古風な門の建築、それらは、一つのまとまつた藝術品として、對岸の高層建築を威壓しきほどの品位を見せてゐる。自分は以前に幾度となくこの門の前を通つたのであるが、しかし、こゝにこれほどまで鮮かな藝術を見出したことはなかつた。その後、この門が修築せられたにせよ、以前とさほど形を變へたわけではない。何がこのやうに事情を變ぜしめたのであらうか。ほかでもない、塚側に並んだ高層建築なのである。それが明白に異なつた様式を以つて、この石垣と門とに對立した時、石垣や門は、いはば額縁の中に入れられた。即ち、それらは己自身になつた。そこで、石垣や門のもつてゐる固有の様式が、また明白に己自身を見

せ始めたのである。石垣や門の屋根などのもつてゐる彎曲線は、對岸の高層建築には全然見出されないものである。石垣の石の積み方も、規格の統一とはおおよそ縁のない、又、機械的といふ形容の全然通用しない、随つて、それの大きさ、それの形の石に、それぞれその場所を與へた、あの悠長なやり方である。それらは、もはや現代には用ひられ得ぬものであるかもしれない。しかし、それによつて形成された二つの様式が、その特殊の美をもつことは、消し去るわけには行かないのである。

復興された東京を見て感じさせられたことも、結局は、これと同じであつた。巨大な高層建築に取り囲まれた宮城前の廣場に立つて、しみじみと感じさせられることは、昔ながらの遺構が、實に強い底力をもつてゐるといふことである。それは、周圍に對照のない時には、さほど目立たなかつた。それほど何げのない、なだらかな、當り前の形をしてゐるからである。然るに、その何げない形の中から、對照に應じて、潑刺としたものが湧き出て来る。例へば、櫻田門がそれであ

る。あの門外で眺められるお塚の土手はかなり高い。しかし、それは穩かな、又、なだらかな形の土手であつた。然るに、今この門外に立つて見ると、大正・昭和の日本を記念する巨大な議事堂が丘の上に立つてゐる。さうして、間近には警視廳の大建築が、そゝり立つてゐる。さうなると、あのなだらかな土手が、不思議にも、偉大さを印象し始めるのである。あの塚と土手によつて區切られてゐる空間が、異様に力強い巨大さを感じさせるのである。誰でも、議事堂や警視廳の建築を眺めた後で、目を返してお塚と土手とを眺めるならば、刺激的な藝の後で無言の腹藝を見るやうな、深い喜びを感じるであらう。さうして、更に門内に歩み入つて、古風な二つの門と、さびた石垣と、お塚の土手とだけで出来てゐる靜寂な世界の中に立つと、そこに、どれほど眞實なもの、偉大なものがあるかを感ぜずにはゐられないであらう。

少し感じは異なるが、大阪城もまた、古い時代を記念する大きい遺蹟である。中の島あたりに高層建築が殖えれば殖えるほど、大阪城の偉大さは増して来る。

必要である。繪で見ると、巨石の上には、扇をかざした人が踊つてゐる。といふのは、全身を指揮棒に代へて、群衆の呼吸を合はせてゐるのである。現在、京都の祇園祭の山車の引き方は、そのかすかな遺習であるかもしれない。大阪城の巨石の如きは、何百人何千人の力を一つの氣合ひに合はせなくては、一尺も動かすこともできなかつたであらう。それでもまだ、どうして動かせたか見當のつかないほどの巨石がある。さういふ巨石を数多くあの丘の上まで運んで来るためには、どれほどの人力を要したかわからない。その巨大な人力が凝つて、あの城壁となつてゐるのである。その點に於いては、エジプトのピラミッドもローマのコロセウムも、大阪城に及ばない。しかも、さういふ巨大な人力を、あの城壁に結晶させた豊太閤は、現代に至るまで三百餘年間、京都・大阪の市民から、「偉い奴」であるとして讃美され續けて來たのである。さうして、この「偉い奴」を記念する醇舞の行列は、新しい高層建築の並んだ通りを、今もなほ練つて行くのである。お城が偉大さを印象すると主張することは、お城を

さうして、それは前の場合とは異なつて、先づ何よりも、あの石垣の巨石にかゝつてゐる。あの巨石は、決して何げない、當り前のものとはいへぬ。のしかゝるやうに人を威壓する意志が、あそこには表現せられてゐる。唯石垣に並べただけの石に、そんな表現があるものかと言ふ人があるかもしれない。しかし、大阪城を見る人は、誰だつてあの石には驚くのである。なぜ驚くか。山の上の巨石を見ても同じ驚きは起らない。さういふ巨石を大阪まで持つて來て、石垣の石として使ひこなしてゐる、その方に驚くのである。自分はあゝいふ巨石運搬に就いての詳しい事情は知らないが、専門家の研究を瞥見したところによると、結局は多衆の力によるらしい。しかし、その多衆の力といふものが、箇々の力を累計したものではなく、一つの全體的な力に統一されなくては、巨石は動かかないのである。煉瓦を積んで大伽藍を造る場合には、多衆の力は働いてゐるが、その力は煉瓦を運ぶ箇々の力の集積であつてよい。巨石運搬の場合には、大綱に取り附いた無数の群衆と、その群衆の力を一つにまとめる指導者とが

造つた時代を呼び返さうとすることでもなければ、又、さういふ營造物を新しく造らうとすることでもない。唯それ／＼の時代は、それ／＼の弊害や弱點をもつと共に、又、その時代固有の偉大さをもつてゐるといふ事實の指摘にほかならない。

人はそれ／＼の時代的風土的な特殊の様式に對して眼鏡の度を合はせることを學ばねばならぬ。さうすることによつて、それ／＼のものが鮮明に見え、それぞれのものもつ意義が的確に讀み取れるのである。

(和辻哲郎ノ文ニ據ル)

文法篇

〔文語の續き〕

一 文語助動詞の接續と活用(一)

〔一〕(一)本を讀む。

(二)本を讀まず。

(三)本を讀みたり。

(四)本を讀ましむ。

(五)本を讀ましめたり。

(六)本を讀ましめず。

(七)本を讀ましめざりき。

問題1 (イ)右の例文を、意味の上からそれ／＼比較してみよ。

(ハ)その意味の違いは、どの部分で表されてゐるか。

(ニ)それ／＼の例文には、助動詞が幾つ用ひてあるか。

(三)助動詞に活用のあることを、右の例文

文法篇

に就いて示せ。

〔二〕文語の助動詞も、用言に附いていろ／＼の意味を加へてその叙述を助け、或は體言などに附いてこれに叙述する意味を加へる。さうして用言に附く場合には、どんな活用形に附くかが助動詞ごとにきまつてゐる。随つて、文語の助動詞も、口語の場合と同様、どんな語に附くか、どんな活用形に附くかによつて、幾つかの種類に分けられる。

問題2 口語の助動詞は、接續の仕方から見て幾種類に分けられるか。

〔三〕文語の助動詞は、口語のに比べるとその数が多く、又、口語のとは違つた語を用ひることが多い。又、活用に於いても口語と違つた所が多い。

〔四〕すさす

手紙を書く。

手紙を書かず。

試験を受く。

試験を受けさす。

右の言ひ方を比べてみよ。この「す」「さす」は口語の「せる」「させる」に當るものである。

問題3 口語の助動詞「せる」「させる」はどんな意味を表す語か。

「す」「さす」は次のやうに活用する。

(一) われに 知らせず。 汝に 見させむ。

(二) 汝に 知らせたり。 外を 見させた

り。

(三) かれに 知らず。 人を やりて 見

さす。

(四) 遂に 知らずる 時、 敢へて 見さす

ことなし。

(五) その 由 知らずれ 見さすれど 人影

ども 聞かずして もなし。

やみぬ。

(六) われに 知らせよ。 早く 見させよ。

問題4 右の例文を基にして、「す」「さす」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

○サ変動詞に於いては、その未然形に「す」が附いて、例へば「旅行せ^す」「理合せ^す」「となる^が」普通であるが、「旅行さす」「理合せ^{さす}」のやうな言ひ方をすることもある。

【五】しむ

読み書きを 習はしむ。

弟を 行かしめむと 欲す。

團結を 強固ならしめたり。

鬼神をも 泣かしむる 行動なり。

人を 樂しましむれど、己は 樂しみを 求め

ず。

われに 言はむと 欲する ところを 言はしめよ。

右のやうに、「しむ」は「す」「さす」と同様の意味を表す。

問題8 右の例文を基にして「しむ」の活用を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

問題9 「しむ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

文法 13

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
す						
さす						
主な用法	連なる	連なる	切	ひ	連なる	連なる
	ズ	にタリ	に言	ひ	にド	命令の意
	連なる	連なる	切	連なる	連なる	切味で言ひ

問題5 「す」「さす」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

問題6 右の例文に於いて「す」が附いてゐる動詞は何活用か。「さす」が附いてゐる動詞は何活用か。

「す」「さす」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。次の語の(一)の類の動詞には「す」が附き、(二)の類の動詞には「さす」が附く。

(一) 打つ 喜ぶ 取る 養ふ 移す 死ぬ あり

(二) 強ふ 見る 預く 來 出づ 射る 受く 作業す

問題7 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何活用か。

問題10 次の語に「しむ」を附けてみよ。
動く 見る あり 死ぬ 來 作業す 樂し 高し 静かなり 堂々たり

○口語の文章の中に、この「しむ」を用ひることがある。その場合には「しむ」は下一段に活用する。
二艘のボートに 分乗せしめた。
心膽を 寒からしめる。

【六】る

この助動詞は、口語助動詞「れる」「られる」に當るものである。

(イ) 工夫に 心を 奪はる。

幾たびか ことわりたれども、許されず。

春は 堂宇 霞に 包まれて、さながら

夢のごとし。

柿右衛門風と 呼ばるる 陶器を 作り

出せり。

人に せしめるれど 願みず。

頼みがひ ある 者と 思はれよ。

(ロ) 多年の 苦心 報らる。

一藝 ある 者は、必ず 擧げ用ひられ
む。

道は 夜來の 雨に 清められたり。

當時の お庭などは、今日も そのまゝ
保存せらるるなりとぞ。

人に 賞讃せらるれど、いさゝかも 誇
らず。

人に 信頼せられよ。

問題 11 右の例文を基にして「る」「らる」の活用
を表に作れ。用言のどの活用と同じか。

問題 12 「る」「らる」はどんな活用形に附くか。

例文によつて調べてみよ。

問題 13 右の例文に於いて、「る」の附いてゐる動
詞は何活用か。「らる」の附いてゐるのは何
活用か。

「る」「らる」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には
附かない。次の(一)(二)の類の動詞には「る」が付き、
これらとは意味が違つてゐる。

問題 15 一體どう違ふか。口語の「れる」「られる」

のことをも参照して考へよ。

これらの「る」「らる」は、前に擧げた「る」「らる」
と活用も続き方も同じである。但し、(一)及び(二)
の場合の「る」「らる」には命令形がなす。

問題 16 次の「らる」を區別せよ。

(一) 世界に 名を 知らる。

(二) 廣く 用ひらる。

「へ」尊敬の意味を表すには、助動詞の「る」「らる」

を用ひるほかに、尊敬の意味を含んだ特別の動詞を
用ひることがある。その主なものは次の通りである。

召す 思し召す きこしめす しろしめす

たまふ のたまふ います まします おはす

おはします 仰す

このうち「召す」「思し召す」「きこしめす」「しろし
めす」「仰す」などには、更に尊敬の助動詞「る」「ら
る」の附くことがある。

「み」「す」「さす」「しむ」が尊敬の意味を表すことが

(二)の類の動詞には「らる」が附く。

(一) 焼く 移す 打つ 養ふ 怪しむ 送る

死ぬ あり

(二) 見る 用ふ 閉づ 預く 慰む 蹴る 來
罪す。

問題 14 (一)の動詞は何活用か。(二)の動詞は何
活用か。

○サ變動詞に於いては、その未然形に「らる」が附い
て「鍛錬せらる」「うはさせらる」となるのが普通で
あるが、「鍛錬さる」「うはささる」のやうな言ひ方
をすることもある。

「セ」(一) 一日に 十里は 行かるべし。

この 關所、たやすくは 越えられず。

(二) 母の 便りのみ 待たる。

ありし 日の 姿 思ひ出でらる。

(三) 父上 外地より 歸らる。

先生も 參加せらる。

右の(一)(二)(三)の「る」「らる」は、それと違
つた意味を表す。又、前に擧げた「る」「らる」も、

ある。この場合は大抵「らる」「たまふ」のやうな尊
敬の意味をもつ語と共に用ひられる。

ほのかに 承れば、この 御苑は、明治天皇

御みづから 森の 下道、下草まで 何くれと

御仰せ ありて、自然の まゝに 作らせたま

ひ、昭憲皇太后 かぎりなく めでさせたまひ

て、しばしば 行啓 あらせられたりとぞ。

御徳を 後の 世に 垂れさせらる。

陛下 行幸せしめたまふ。

「ロ」

色合ひも さだかならず。

急がずば ぬれざらましを 旅人の あとより

晴るる 野路の 村雨。

塵 一つ 残らず なりぬ。

しばし 感じて やまざりき。

思ひも よらぬ 出來事に 驚きたり。

己の 欲せざる ところ、人に 施す こと

なかれ。

境内は さして 廣からねど、木立 ものふり

ていと神々し。

齡三十に満たされど、その學識甚だ

深し。

賤しきをそしらざれ。

右のやうに「ず」は打消を表す。口語助動詞の「な

い」に當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ず	ず	ず	ず	ざる	ね	ざれ
主な用法	ベ・ムにナル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言

問題 17 これに似た活用が用言にあるか。

問題 18 「ず」はどんな活用形に附くか。例文によ

つて調べてみよう。

「ず」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 19 次の語に「ず」を附けてみよう。

(一) 聞く 立つ 見る 起く 蹴る 助く 死ぬ

あり 來 練習す

(二) よし 正し

(三) 静かなり 堂々たり

には屢々現れる。終止形「むす(んず)」連體形「むする(んず)」已然形「むすれ(んず)」の三形だけがある。

汝が やうなる 者は、いつも 重忠にこそ助

けられんすれ。

【III】

じ

喜びの 來たらむ 日も 遠からじ。

かれは 誤りを 重ねじと 誓ひぬ。

右のやうに、「じ」は「む(ん)」に對する打消であつて、推量や意志を表す。口語の「ないだらう」又は

「まし」の意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
じ	じ	じ	じ	じ	じ	じ
主な用法	ベ・ムにナル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言

○「じ」の連體形及び已然形は、古い時代に用ひられたことがある。

問題 23 「じ」はどんな活用形に附くか。例文によ

つて調べてみよう。

文法篇

【II】

む(ん)

やがて 花 咲かむ。

千萬人と いふとも われ 往かむ。

美しさ たとへむ 方 なし。

事の 由は かれこそ 知らぬ。

右のやうに「む」は推量する意味、又は話し手の意

志を表す。口語助動詞の「う」「よう」に當る。

○この「む」は「ん」と發音する。又發音に従つて

「ん」と書くことも少くない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
む(ん)	む(ん)	む(ん)	む(ん)	む(ん)	む(ん)	む(ん)
主な用法	ベ・ムにナル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言

問題 20 これに似た活用が用言にないか。

問題 21 「む(ん)」はどんな活用形に附くか。例文

によつて調べてみよう。

「む(ん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 22 問題 19 の例語に「む(ん)」を附けてみよう。

○「む(ん)」と殆ど同じ意味を表すものに「むす(んず)」がある。現代の文語では殆ど用ひないが、昔の文章

「じ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 24 問題 19 の例語に「じ」を附けてみよう。

【III】

まほし

一人 行かまほし。

さまで 見まほしからず。

さほど 行かまほしくば、伴なひて 行かむ。

まことに あらまほしく 思はる。

いと 行かまほしかりき。

少しの ことにも 先達は あらまほしき ものなり。

かくこそ あらまほしけれ。

右のやうに「まほし」は希望する意味を表す。この助動詞

は、昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし	まほし
主な用法	ベ・ムにナル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言	ズル・キ言

問題 25 この活用は、用言のどの活用形に似てゐるか。

問題 26 「まほし」はどんな活用形に附くか。例文によ

問題27 問題19の例語に「まほし」を附けてみよ。

早く、知らましかば、かゝる不覺はなからまし。
とやせまし、かくやせまし。

この「まし」は、實際さうでない事を、假にさうと想像して言ふ場合に用ひる。又「む(ん)」と同様に、口語助動詞「う」「よう」の意味に用ひることもある。「まし」は昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

○上代には「ませ」といふ形があり、「ませば」と用ひられた。

問題 29 「まし」ほどの活用形に附くか。例文によつて

「まし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題19の例語に「き」を附けてみよう。

「き」の終止形はカ變の動詞には全く附かない。その連體形・已然形は、カ變の連用形に附くほか未然形にも附く。

又、「き」の終止形は、サ變の動詞の連用形に附くが、連體形・已然形はサ變の未然形に附く。

掘盡きて、草の根を食ひ物としき。
専心耕作に従事せしかば、豊かなる稔りを得たり。

けり、それより後、義家は匡房を師として學びけり。

一座の人々、これを聞きて、一度にどつとど。笑ひける。

しはし 待てと言ひけれども、耳を傾くる

九

二 文語助動詞の接續と活用 (二)

一人として 感泣せざるは なかりき。
遠く 歐洲に 起りし 事件も、數時間にして
報道せらる。

大いに治績を挙げしかども、長くその職にゐること能はざりき。

右のやうに、「き」は過去を表すのに用ひる。口語ではこの場合「た」を用ひる。

問題31 これに似た活用が用言にあるか。

問題32 「き」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「き」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

者なかりき。

右のやうに「けり」は過去を表すのに用ひる。口語では「た」がこれに當る。この「けり」は又、咏歎の意味にも用ひる。

まことの契りは親子の間にぞありける
子をば人の持つべかりけるものかな。

○「けら」は上代に用ひられたが、現在では用ひない。
問題34 この活用は、用言のどの活用に似てゐるか。

か。

問題 35 「けり」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「けり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 36 問題 19 の例語に「けり」を附けてみよ。

問題 37 次の「一けれ」を區別せよ。

二 波とそ 高けれ。

(三) 夢にこそ見られ

【二五】ぬ

遂に 目的を 達しぬ。

この 事 江戸に 聞えなば 必ず 悪しかり
なむ。

朱雀門まで 一夜が ほどに 塵灰と なりに
き。

色は にほへど 散りぬるを、わが 世 たれ
ぞ 常ならむ。

平家は 落ちぬれど、源氏は 未だ 入りかは
らず。

右のやうに、「ぬ」は完了、即ち動作又は事件が完
結する意味を表す。口語の「た」に當る場合が多い
が、又「てしますふ」「てしまつた」「やうになる」「や
うになつた」に當る場合もある。

基本の形				未然形連用形終止形連體形已然形命令形			
ぬ	な	に	ぬ	ぬ	ぬ	ぬ	(ぬ)
主な用法	連なる	速なる	切なる	言ひ	時	に	命令の意味で

○命令形として古く「ぬ」といふ形があつた。

われに 得させてよ。

右のやうに、「つ」は「ぬ」と同様、完了を表す。

問題42 「つ」の活用を表に作れ。用言のどの活用
と同じか。

○命令形は、現代の文語では餘り用ひない。

問題43 「つ」はどんな活用形に附くか。右の例文
によつて調べてみよう。

「つ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題44 問題19の例語に「つ」を附けてみよう。

問題45 次の「―つ」を區別せよ。

(一)所持の 品を 捨つ。

(二)見るべき ものは 見つ。

○「行きてけり」「行きてき」の「て」は助動詞「つ」
の連用形であるが、「行きて聞ふ」の「て」は助詞
である。

【二六】たり

戸ごとに 國旗を 掲げたり。

美名を 今に 傳へたり。

人は 形有様の 勝れたらむこそ あらまは

文法篇

はや 船出 して、この 浦を 去りぬ。

問題38 この活用は、用言のどの活用と同じか。

問題39 「ぬ」はどんな活用形に附くか。例文によ
つて調べてみよう。

「ぬ」は動詞・形容詞に附く。

問題40 問題19の例語に「ぬ」を附けてみよう。

○古くは、「ぬ」はナ變の動詞には附かなかつたが、今
は附けることもある。

問題41 次の「―ぬ」を區別せよ。

(一)日は 没しぬ。

(二)見ぬ 古は 知らず。

(三)智と 徳とを 兼ぬ。

【二七】つ

とかくして 今日も 暮しつ。

たゞいま 行きてむ。

遂に 都を 去りてけり。

ほととぎす 鳴きつる 方を 眺むれば、たゞ

有明けの 月を 残れる。

しばしとてこそ 立ちとまりつれ。

いかるべけれ。

一の木戸口の 邊まで 寄せたりけり。

苦むしたる 岩石 壁のごとく 突き立ちた

り。

大いなる 災害を 受けたれども 少しも 屈
せず。

その 修行者をば 暫く 置きたれ。

右のやうに、「たり」は過去・完了、又は「である」
「である」の意味に用ひる。即ち口語の「た」に當る。

問題46 「たり」の活用を表に作れ。用言のどの活
用と同じか。

○命令形は、現代の文語では用ひない。

問題47 「たり」はどんな活用形に附くか。例文に
よつて調べてみよう。

「たり」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かな
い。

問題48 問題19の例語の(一)に「たり」を附けて
みよう。

【二八】たし

一日も早く故郷に歸りたし。
歸りたくば速かに出發せよ。

父母に逢ひたからむ。

御目にかけたく存じ候。

山に登りたかりき。

家にありたき木は松櫻。

定めて行きたかるべし。

舞をも見たけれどもそれは次のこととせむ。

右のやうに「たし」は自身の希望する意味を表す。

口語の「たい」に當る。

問題49 「たし」の活用を表に作れ。用言のどの活

用に似てゐるか。

問題50 「たし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「たし」は動詞に附く。形容詞・形容動詞には附かない。

問題51 問題19の例語の(一)に「たし」を付けてみよ。

「三」 けむ(けん)

昔の友はいつち行きけむ。

ここに住みけむ 人の心ゆかし。

人々の心のうち、そこは嬉しうもまたあ

はれにもありけむ。

右のやうに「けむ(けん)」は、過去の事を推測する意味を表す。口語の「ただらう」「たであらう」の意味に用ひる。

この語は現代の文語では普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
けむ(けん)	○	○	けむ(けん)	けむ(けん)	けむ(けん)	○
主な用法			切	ひ	る	連なる連なるに

問題52 これに似た活用が用言にないか。

問題53 「けむ(けん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「けむ(けん)」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題54 問題19の例語に「けむ(けん)」を付けてみよ。

問題55 次の「けむ」を區別せよ。

(一) 何事かありけむ。

(二) 汝に授けむ。

數十年の間に、驚くべき發達を遂げたり。

未だ幼かるべけれど、その巧みさ言はむ方なし。

「三」 べし

「三」 文語助動詞の接續と活用(三)

(一) 會議に参加する 人員は百人を超ゆべし。

(二) 明日必ず參上致すべし。

(三) 一念は岩をも通すべし。

(四) 國民として盡くすべき道なり。

(五) 明朝八時に集合すべし。

右のやうに「べし」は、口語の「う」「よう」のやうに推量や意志を表すほかに、「ことができる」(可能)、「なければならぬ」(當然)、「なさい」(命令)などの意味を表す。

「べし」は次のやうに活用する。

もし行くべしは直ちに行かむ。

心は常に勞すべし、苦しむべからず。

いつまでもかくのごときものに満足すべくもあらず。

つとに正すべかりしものなり。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
べし	べから	べかり	べし	べき	べけれ	○
主な用法	バ・スに	ナル・キ	言	ひ	連なる連なるに	連なるに

問題56 この活用は、用言のどの活用形に似てゐるか。

「べし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題57 次の動詞に「べし」を付けてみよ。どんな活用形に附くか。

救ふ 知る 見る 仲ぶ 蹴る 受く 死ぬ 來

運動す

問題58 ラ變・形容詞・形容動詞に「べし」を付けてみよ。どんな活用形に附くか。

あり 高し 美し 丁寧なり 決然たり

○「べし」の連體形「べき」は、口語の文章に於いても用ひられることがある。
これこそ、われらの行くべき道ではなからうか。

〔三〕まじ

- (一) 世にかほどの愚者はあるまじ。
- (二) われは再びかれに會ふまじと決心せり。
- (三) 言ふまじきことを言ひ、行なふまじきことを行なふ。
- (四) ゆめ 忘るまじきぞ。

右のやうに「まじ」は推量・意志を表すほかに「し」てはならない(當然)、「するな」(禁止)などの意味を表す。大體「べし」の打消と見ることができ、口語の「まい」に當る。

「まじ」は次のやうに活用する。
参るまじくば そのゆゑを申せ。
さる事 あるまじく 思はる。
人には 言ふまじかりけり。

附くか。

〔四〕らむ(らん)

雲の いづくに 月 宿るらむ。
山門 高き 松風に 昔の 音や。こもるらむ。
みづからは いみじと 思ふらめど いと 口惜し。
右のやうに「らむ(らん)」は現在の事實に就いて想像する語で、口語の「だらう」又は「であらう」の意味に用ひる。この語は現代の文語では普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らむ(らん)	○	○	らむ(らん)	らむ(らん)	らめ	○
主な用法			切言	るひ時	に下モ	に下モ

問題 63 これに似た活用が用言にないか。
問題 64 「らむ(らん)」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「らむ(らん)」は、動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。
問題 65 問題 57 の例語に「らむ」を附けてみよ。動詞のどんな活用形に附くか。

文法篇

學問は いかなる 者にも 劣るまじ。
いかにも かなふまじき 由 答へたり。
冬枯れの 景色こそ。秋には をさ／＼ 劣るまじけれ。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
まじ	まじく	まじく	まじ	まじき	まじけれ	○
主な用法	連なるに下モ	に下モ	切言	るひ時	に下モ	に下モ

問題 59 この活用は、用言のどの活用形に似てゐるか。

問題 60 「まじ」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよ。

「まじ」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ變を除く)と、ラ變・形容詞・形容動詞とは、その附く活用形を異にする。

問題 61 問題 57 の例語に「まじ」を附けてみよ。
動詞のどんな活用形に附くか。
問題 62 問題 58 の例語に「まじ」を附けてみよ。
ラ變・形容詞・形容動詞のどんな活用形に

問題 66 問題 58 の例語に「らむ」を附けてみよ。ラ變・

形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

問題 67 次の「らむ」を區別せよ。

- (一) 途中には、旅店にあらむ。
- (二) などしか言ふらむ。

〔五〕めり

はや 夜も 明くめり。

この 人をなむ。聖人とは いふめる。

何事をか 言ふめれど、聲 低くて 聞えず。

右のやうに、「めり」は「様子だ」と大體を推量して言ふ意味に用ひる。「めり」は昔の文章には用ひられたが、現代の文語では、普通には用ひない。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
めり	○	○	めり	める	めれ	○
主な用法			切言	るひ時	に下モ	に下モ

○連用形「めり」は、これに「き」「し」「しか」の附いたものが稀に用ひられただけである。

問題 68 この活用は、用言のどの活用形に似てゐるか。

問題 69 「めり」はどんな活用形に附くか。例文によつて

調べてみよう。

「あり」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。但し、動詞(ラ変を除く)と、ラ変・形容詞・形容動詞とでは、その附く活用形を異にする。

問題70 問題57の例語に「あり」を附けてみよう。動詞のどんな活用形に附くか。

問題71 問題58の例語に「あり」を附けてみよう。ラ変・形容詞・形容動詞のどんな活用形に附くか。

【三】り

四月より 級長と なれり。

その 翁、頭に 雪を いたゞけり。

時計は 絶えず 時を 刻めり。

頂上に 達せるは 十一時なりき。

屏風に 描ける 絵の 美しさ 言はむ 方なし。

右のやうに、「り」は「たり」と同じやうに、過去・完了、又は口語の「てゐる」「てある」の意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
り	(ら)	(り)	り	る	(れ)	(れ)
主な用法	連なるに	(キ)に	言ひ	連なるに	ドモに	命令の意で

○未然形・連用形・已然形・命令形は、現代の文語には用ひない。

問題72 この活用は、用語のどの活用と同じか。

問題73 「り」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「り」は四段活用の已然形と、サ變の未然形だけに附く。

問題74 次の語に「り」を附けてみよう。

(一) 取る 書く 出す

(二) 努力す 勉強す

問題75 次の「ーめり」を區別せよ。

(一) 船は 次第に 沈むめり。

(二) 船は 水中に 沈めり。

四 文語助動詞の接續と活用(四)

【三】ごとし

喜びを 歌ふがごとく、行く われを 迎ふる

ごとし。

被害は 輕からざるがごとし。

果して 君の 言のごとくは、予は 黙すること 能はず。

岩壁は 屏風の^{ごとく} わが 行く手を さへ ざる。

汽車は 風光 繪のごとき 湖畔を 走る。

最近の 暑さは 近年 稀にして、昨日のごときは 實に 三十四度に 達せり。

右のやうに「ごとし」は他にたとへて言ふのに用ひ、又、不確かな斷定を表すのに用ひるが、そのほか、例示に用ひることがある。口語の「やうだ」に當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
ごとし	ごとく	ごとく	ごとし	ごとき	〇	〇
主な用法	連なるに	言ひ	連なるに	言ひ	連なるに	命令の意で

○「ごとし」には、已然形・命令形がない。

○語幹「ごと」が、連用形又は終止形のやうに用ひら

れることがある。

月のごとく、日輪 ほのかに 浮かぶ。

かつこう、かつこう、かんと鳥、こだまのごと

夢のごと。

問題76 この活用は、用語のどの活用に似てゐるか。

問題77 右の例文では、「ごとし」はどんな品詞に附いてゐるか。

「ごとし」は用語の連體形、又はこれに助詞「が」の附いたもの、又は體言に助詞「の」の附いたものに附く。

【三】「ごとくなり」は「ごとし」に「なり」の附いたものである。

けはしき 坂を 登る こと、平地を 行くが ごとくなり。

義捐金 山のごとくに 集る。

禍福は あざなへる 繩のごとくなれば、逆境に 立てりとして 深く 歎くべきに あらず。

「ごとし」に缺けてゐる已然形の代りに、この「ごと

「なれ」が用ひられる。

【二九】

雨 降るらし。
雨 降るらしく 見ゆ。
雨の 降るらしき 空あひなり。
右のやうに「らし」は推定する意味を表す。口語の「らし」がこれに當る。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	らし	らし	らし	らし	○	○
主な用法	連なるにナル・キ言	連なるに切	ひる連なるに	ひる連なるに		

問題 78 これに似た活用が用言にないか。

問題 79 「らし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

「らし」は動詞・形容詞・形容動詞に附く。

問題 80 問題 19 の例語に「らし」を附けてみよう。

「らし」は又、體言にも附く。

明日は 雨天らし。

なり。

こは まことに 驚くべき ことなりすや。

孔子は 正義の 念 強き 人なりき。

宣朝は 頼朝の 子にして 鎌倉右大臣といふ 歌人なり。

よき 辭書なる こと 明らかなり。

才能 ある 學徒なれども、なほ 努力 十分ならず。

右のやうに「なり」は口語の斷定の「だ」と同じ意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
なり	なり	なり	なり	なり	なれ	○
主な用法	連なるにキ・シテ言	連なるに切	ひる連なるに	ひる連なるに	ひる連なるに	

問題 82 この活用は用言のどの活用に似てゐるか。

問題 83 右の例文では「なり」はどんな品詞に附いてゐるか。

文法篇

かなたに 寺らしき もの 見ゆ。

【三〇】 この「らし」は、古くは次のやうに用ひた。

み雪 降る 冬は 今日のみ、鶯の 鳴かむ 春へは 明日にし あるらし。
奥山の 雪消の 水ぞ 今 増さるらし。
年月の ゆき ふりゆけば、草も 木も 老いこそすらし。 白く 見ゆれば。

活用は、次のやうにまとめられる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
らし	○	○	らし	(らし)	(らし)	○
主な用法			切言	ひる結び	ひる結び	

○連體形は「ぞ」の結び、已然形は「こそ」の結びとしてみ用ひられた。

問題 81 この「らし」はどんな活用形に附くか。例文によつて調べてみよう。

この「らし」は動詞の終止形に附く。但し、ラ變の動詞には連體形に附く。

【三一】

なり 若き 入に 見ならはせむとて かくは する

「なり」は體言、又は用言の連體形に附くのが普通である。

問題 84 次の語に「なり」を附けてみよう。

(一) 繪畫 學者 汽車 汽船

(二) 行く 見る 出づ 起く 歎る 死ぬ 來 爲 あり 早し 悲し のどかなり 潑刺たり

○「なり」の連體形「なる」は、「にある」の意味又は「といふ」の意味に用ひることがある。

大和なる 法隆寺。

顔回なる 者 あり。

○「ごとし」に「なり」が附く場合は、連體形に附かずに、その連用形に附いて、「ごとくなり」となる。

【三二】 「なり」は又、次のやうに用ひることがある。

秋の 野に 人 まつ 虫の 聲 すなり。

秋風に 初雁がねぞ きこゆなる。

即ち動詞の終止形に附いて詠歎の意味を表す。

【三三】

なり 君は わが 良友なり。

常に よき 生徒たらざるべからず。

われ、かつてこの学校の生徒たりき。
人としての道を、盡くすべし。
人の友たる者は、誠なかるべからず。
身は一國の宰相たれども、その位置に
誇る色なし。
従順にして、勇敢なる生徒たれ。
右のやうに「たり」も「なり」と同様、口語の斷定の「だ」と同じ意味に用ひる。

基本の形	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
たり	た	たり	たり	たる	たれ	たれ
主な用法	連なるにキナシテ言	るに連なる切	る時	連なるにドモ	連なるに切	命令の意

問題85 この活用は、用言のどの活用と同じか。
問題86 右の例文では「たり」はどんな品詞に附いてゐるか。

「たり」は體言だけに附く。
「(一)こは、われらの學校なり。」
われらは、よき生徒たりむ。

ことのできるのは、どの助動詞か。
問題90 (イ)用言の未然形に附くのは、どの助動詞か。

(ロ)連用形に附くのは、どの助動詞か。
(ハ)終止形に附くのは、どの助動詞か。
(ニ)連體形に附くのは、どの助動詞か。
(ホ)已然形に附くのは、どの助動詞か。
問題91 用言や助動詞以外の語に附くことのできるのは、どの助動詞か。

問題92 既に調べて来たやうに、助動詞にはいろいろ活用
の違つたものがある。故に助動詞は、その活用の仕
方に基づいて、幾つかの種類に分けることができる。
問題93 (イ)動詞と同じ活用、又はこれに準ずる活
用をするものはどれか。それは動詞のど
の種類に活用と同じか。

(ロ)形容詞と同じ活用、又はこれに準ずる
活用をするものはどれか。
(ハ)形容動詞と同じ活用、又はこれに準ず
る活用をするものはどれか。

(三)その建築は、甚だ美麗なり。
前途は、洋々たりむ。
(一)は體言に、口語の「だ」に當る助動詞「なり」
「たり」が附いたものである。(二)は形容動詞であ
る。この二者を混同してはならない。

問題87 次の「たり」を區別せよ。
(一)日本第一の名醫たり。
(二)その決意、斷乎たり。
(三)どうと、倒れたり。

問題88 次の「なり」を區別せよ。

(一)水は、液體なり。
(二)風、冷かなり。

「(三)文語に用ひる助動詞は、右に挙げた通りである。
さうして、以上はどんな種類の語又はどんな活用形
に附くかによつて順序立てたものである。

問題89 (イ)用言だけに附くのは、どの助動詞か。
(ロ)動詞だけに附くのは、どの助動詞か。
(ハ)動詞のほか形容詞にも附くことのでき
るのは、どの助動詞か。形容動詞に附く

(ニ)用語とは違つた特殊の活用をするもの
はどれか。

(ホ)語形變化のないものはどれか。
「(七)尊敬・謙讓の意味をもつてゐる動詞、又は「あ
り」の意味を丁寧に言ふ動詞を、助動詞のやうに用
ひることがある。

(一)御衣を、たまふ。
殿下、臨場したまふ。
(二)歌を、奉る。
文を、まわらす。
(三)なにがしも、候ふ。
ここに、侍り。
無事に、暮し居り候。
われらも、既に
開き侍り。

問題93 左の文中の傍線を附けた助動詞の用法を
説明せよ。
(一)されば、今この馬、ゆめにも求め得べし
とは、思はざりき。

(二) されど、これは わらは この 家に まゐりし
時、この 鏡の 下に 父の 入れたまひて、ゆ
めゆめ、世の つねの ことに 用ふべからず。
汝の 夫の 一大事 あらむ、時に まゐらせよ
とて、たまひき。

問題 94 左の文から助動詞を抜き出し、その用法
を説明せよ。

白河樂翁公、年十二にて田安邸にありし頃、幕布鳥
居坂の戸川内膳の邸宅より火起り、大火といふにあ
らざれども、焼死せし者多かりしかば、「この火事は
人の命をとりぬ坂これより上のとがほないせん。」と
落首せる者ありけり。近侍の人々、「いかによく詠
みたり。」と評し合ひけるを、君聞き給ひて、「余が詠
まむには、さは言はじ。」とありければ、人々「さら
ば何とか詠ませ給ふ。」と問ひまゐらするに、「第四の
句を『怪我の事なり』とすべきなり。」と仰せらる。一
句にて一首の意味を全く顛倒せしめ、過ちのやみが
たきに出づるを明らかにせられしは、誠に驚くべき
なり。

問題 95 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一) この所に奥着捨つるべからず。
(二) 雨漸く晴れり。
(三) かれは承諾するまじ。
(四) 奮闘しきども、遂に等外に落ちたりき。
(五) 二人ともよく勉強して居られる由、安心致し候。

五 文語助詞の種類と用法

- (一) 花 散る。 (學力とみに増す。
花を 散らす。 學力を 増す。
(二) かれは 行かず。 汝は 行け。
かれは 行かざれど、 汝は 行け。
(三) 風 吹き出でたり。
風さへ 吹き出でたり。
(四) こは 汝の 本なり。
こは 汝の 本なりや。
(五) 勇 本を 正雄に 與ふ。
正雄 本を 勇に 與ふ。
問題 1 右の例文に就いて、助詞がどのやうな働
きをしてゐるか、考へてみよ。

問題 2 右の例文の助詞は、どんな品詞に附いて

ゐるか。

(一) 文語の助詞も、口語の助詞と同じやうに、自立
語に就いてその語と他の語との關係を示し、或はこ
れに一定の意味を添へる。故に、助詞に於いては、
どういふ語に付き、どういふ語にかゝつて行くかを
明らかにすることが大切である。この點から助詞を
分類すると、口語の場合と同様、大體四種類になる。
(二) 文語の助詞は、口語のとは違つた語を用ひるこ
とがあり、又同じ語を用ひても、意味や用ひ方の違
ふものがある。

【四】 第一類

が

「乗手が 用心するならば、馬も けがは なか
るべし。」

「梅が 香に のつと 日の 出る 山路かな。
右のやうに「が」は、主語を示すほかに、文語では
又、體言に連なる修飾語を作るために用ひること

がある。

(一) 白々と あんずの 花の 咲き出でて、 今年も
春の 日ざしと なりぬ。
こは 友よりの 文よ。

「さながら 珊瑚珠の 輝くに 似たり。」

右のやうに「の」は、體言に連なる修飾語を作る
ほかに、主語を表すのに用ひることが少くない。

「書を 讀む。 色の 美しきを 賞す。」

友の 外國に 赴くを 送る。

「野を 過ぐ。 空を 飛ぶ。」

「早くも 列を 離るる もの あり。」

に

「田舎に 住む。 朝 五時に 起き出づ。」

東京に 大地震 あり。

「京都に 到着す。」

「かれは 科學者に なれり。 灰燼に 歸す。」

「見舞に 行く。 筆 買ひに 行く。」

雨に降らる。

弟に寫さしむ。

右のやうに、「を」「に」は口語と格別の違ひはな

き。

北へ飛ぶ。

京都へ去る。

右のやうに「へ」は、文語では主として方向を示すために用ひる。

友と遊ぶ。

氷解けて水となる。

これを歌枕といふ。

叔父と叔母とを訪ふ。

右のやうに「と」は口語と格別の違ひはないが、(四)のやうに對等の資格で並ぶ體言を結びつける場合には、文語では「と」を一々各語の下に附けるのが本格である。しかし誤解を招くおそれのない場合には、最後の「と」をばくくともある。又、(三)のやうに、引用文などを受ける場合には、その終りの用言又は助動詞の終止形を連體形にす

ることがある。

終日業務を取り扱はしむるといふ。

より

鐵より堅きかひなあり。

泣くよりほかのことぞなき。

大阪より歸る。會は六時より始る。

問題3 右の(三)の例文を口語に改めよ。

右のやうに「より」は口語と同じ意味を表すほかに、口語の「から」の意味にも用ひる。

にて

筆にて書く。

飛行機にて歸る。

病氣にて休む。

右のやうに「にて」は口語の「で」に當る。

問題4 次の「にて」は、この「にて」と同じか。

父は、妻家にて、子は、詩人なり。

「三」この種の助詞は、主として體言に附いて、その體言が、同じ文中の他の語に對して、どんな關係に

立つかを示すものである。これを格助詞といふことがある。

「六」文語では、「をして」「を以つて」「に就いて」「によつて」「に於いて」「に於ける」などの言葉で、第一類の助詞と同様に用ひる。

弟をして、先發せしむ。

かれの沈着なるは、これを以つて知るべし。

わが國の經濟に就いて語らむ。

無線電信によつて、危急を報ず。

會議は、東京に於いて開催す。

平安時代に於ける國文學の發達は、假名の發生に負ふところ多し。

「七」第二類

は

(甲)數島のやまと心を人とはば朝日にほふ山ざくら花。

近く寄つて、目にも見ふ。

(乙)風吹けば、波立つ。

遠き處りなければ、近き憂ひあり。

文法稿

今日は、雨降れば外出せず。

問題5 (甲)の例文では「は」は用言のどんな活用形に附いてゐるか。(乙)の例文ではどうか。

問題6 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、文語では「は」「は」は、未然形に附くものと已然形に附くものとがある。未然形に附いた場合は、或る事がらを假定して、それを條件とすることを表す。已然形に附いた場合は、確定した事がらを條件とすることを表すほか、「から」「で」の意味をも表す。

とも

人騒ぐともいさゝかも動ぜず。

いかに複雑なりとも解決せざることあらじ。

いかに心は堅くとも、身は鐵石にあらず。

苦しぐとも忍ぶべし。

問題7 右の例文で「とも」は、動詞のどんな活用

用形に附いてゐるか。形容動詞にはどうか。
形容詞にはどうか。

問題8 右の例文を口語に改めよ。

「ども」は動詞・形容動詞の終止形・形容詞の未然形「く」「しく」に附く。又、或る種の助動詞にはその終止形に、或る種の助動詞にはその未然形に附く。口語の「ても」の意味に用ひる。

○古くは「とも」の意味で「と」を用ひたことがある。

給に描くと筆も及ばじ。

ども

「手を分ちて探りたれども」、遂に發見し得ざりき。

近けれど(ども)車にて行きぬ。

口樹 静かならんと欲すれども風やまず、子養はんと欲すれども親待たず。

呼べど答へず、さがせど見えす。

問題9 右の例文で「ども」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

問題10 右の例文を口語に改めよ。

雨 激しきに 出で行きけり。

未だ 一月も たゞざるに、かの 畫師は

突然 歸り來たれり。

問題13 次の「一」に「を」を區別せよ。

(一)言はぬは 言ふに まさる。

(二)わざ／＼ 訪ひしに 不在なりき。

(三)友は 去りにき。

を

かくとは 思はざりしを、さても 嬉しき 心かな。

問題14 次の「一」を「を」を區別せよ。

(一)苦しきを 忍ぶ。

(二)年なほ 若きを、いかで ざる 任に 堪へむ。

問題15 右の例文で「が」「に」「を」は、用言又は助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

問題16 右の「が」「に」「を」の例文を口語に改めよ。

「が」「に」「を」は、いづれも用言及び助動詞の連體形に附いて口語第二類の助詞「が」「の」「に」に

文法稿

「ど」「ども」は、用言及び助動詞の已然形に附いて、口語の「けれども」又は「ても」の意味に用ひる。

○なほ、「とも」「ど(ども)」の代りに、「も」を用ひることがある。

何らの 事由 あるも、談場に入ること

許さず。

日没まで 搜索せしも、遂に 發見する こと

能はざりき。

問題11 右の文を口語に改めよ。

が

日暮るるまで 待ちたるが、遂に 友は 來たらざりき。

保己」は、五歳の 時、めくらと なりしが、後には 名高き 學者と なれり。

問題12 次の「一」が「を」を區別せよ。

(一)冬に 咲くが おもしろきなり。

(二)ここ かしこ 搜したるが、見えざりき。

に

の意味に用ひる。

て

雨 降りて、地 固まる。

火焰を くゞつて 消防に 努む。

赤くて 大きな 花。

四海 波 靜かにて、天が下 穩かなり。

かれは 小説家にて、且つ 俳人なり。

問題17 右の例文で「て」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

「て」は動詞の連用形(或はその音便の形)、形容詞の連用形「く」「しく」(或はその音便の形)、形容動詞ナリ活用の連用形「に」に附く。又、助動詞の連用形に附く。又、この「て」は次のやうにも用ひられる。

國に 歸らんとて 出發せり。

昔 天竺に 祇園精舎とて 名高き 寺 あり

き。

山 高くして 白雲 峯を 埋め、谷 深くし

て

山 高くして 白雲 峯を 埋め、谷 深くし

て

し

山 高くして 白雲 峯を 埋め、谷 深くし

て 萬丈の 青岩 道を さへきる。

氣候 溫和にして、産物 豊かなり。

悠然として、迫らず。

問題 18 右の例文で「して」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

「して」は、形容詞の連用形「く」「しく」、形容詞の連用形「に」「と」に附く。又、或る種の助動詞の連用形に附く。

て 疑も せで 夜を 明かしぬ。

病 快からで 困じぬ。

問題 19 右の例文で「で」は、用言のどんな活用形に附いてゐるか。

問題 20 右の例文を口語に改めよ。

「で」は動詞及び形容動詞の未然形、形容詞の未然形、「から」「しから」に附く。又助動詞の未然形に附く。助詞「て」に打消の意味が加つたもので、口語の「ないで」に當る。

「で」は動詞及び形容動詞の未然形、形容詞の未然形、「から」「しから」に附く。又助動詞の未然形に附く。助詞「て」に打消の意味が加つたもので、口語の「ないで」に當る。

問題 21 右の例文で「つつ」は動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

問題 22 右の例文を口語に改めよ。

「つつ」は動詞及び或る種の助動詞の連用形に附いて、口語の「ながら」の意味に用ひる。

○なほ、「處」「間」のやうな名詞が、候文などでは第二類の助詞のやうに用ひられることがある。

久しく 病氣にて 引き籠り居り候處、今回 全快 致し候間、御安心下されたく 候。

「へ」この類の助詞は用言や助動詞に附いて、接續詞のやうに、上の語の意味を、下の用言又は用言に準ずるものに続けるものである。これを接續助詞といふことがある。

「九」第三類

は 鯨は 魚には あらず。

美しくは 見ゆれど、欲しとは 覺えず。

知りては あれど、言はぬなり。

「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受けて文を結ぶ時は、必ずその連體形を用ひる。「ぞ」「なむ(なん)」は強く指して言ふのに用ひ、「や」「か」は疑問の意味を表す。又、「ぞ」「や」「か」は、文の終りにも用ひる。「ぞ」は體言又は用言及び助動詞の連體形に、「や」は用言及び助動詞の終止形に、「か」は用言及び助動詞の連體形に附く。「や」「か」は又、反語を示す時がある。この場合には、「やは」「かは」となることがある。

空しく 月日をや(は) 過すべき。

散る 花の 鳴くにし とまる ものならば、

われ 鶯に 劣らましやは。

誰か(は) これに 感泣せざらむ。

花は 盛りに、月は ぐま なきをのみ 見る ものかは。

こそ

底ひ なき 淵やは 騒ぐ。山川の 淺き 瀬

にこそ あだ波は 立て。

文法篇

二十九

「なむ(なん)」

柿本人麿は 歌の 聖なりける。

花や とき、春や おそき。

ありや なしや。

杉野は いづこ、杉野は ぬすや。

誰か ある。

かの 扇を 射落す 者は なきか。

文法篇

二十九

汝は、聞きしにも 似ず 手こそ 荒けれ。
「こそ」が文の中にあつて、用言や助動詞がこれを受けて文を結ぶ時は、必ずその已然形を用ひる。この「こそ」は、特に事物を取り立てて言ふのに用ひる。

右のやうに、「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」を受けて連體形で文を結び、「こそ」を受けて已然形で文を結ぶのを、係結の法則といふ。さうして、右のやうに用ひられる「ぞ」「なむ(なん)」「や」「か」「こそ」を係りの助動詞といふことがある。

だに

塵、一つだに なし。 手にだに 取らず。

問題 23 右の例文を口語に改めよ。

すら

大すら 恩を 知る。

見るにすら 目くるる 心地す。

問題 24 右の例文を口語に改めよ。

右のやうに、「だに」「すら」は、口語の「さへ」「でも」などの意味に用ひ、軽いものを舉げて、そ

右のやうに、「のみ」は口語の「だけ」の意味に用ひる。

ばかり

月影ばかり 昔に 變らず。

巾 五尺ばかりの 小川 あり。

右のやうに、「ばかり」は口語の「だけ」又は「ほど」の意味に用ひる。

まで

東京まで 行く。

など

繪など 描きて 遊ぶ。

家 貧しくして 苦しむなどは 世の 常のことなり。

右のやうに、「まで」「など」は口語と格別の違いはない。「まで」は動作・作用などの及ぶ限度を示し、「など」は例示するの用に用ひる。

【10】この類の助詞には、體言や用言、その他いろいろの語に附いて、副詞のやうに下の語にかゝつて行く用法がある。これを副助詞といふことがある。

れより重いものを推測させるのに用ひる。

さへ

雨 降り、風さへ 吹きぬ。

残る 一人子にさへ 別れたり。

右のやうに、「さへ」は口語の「までも」の意味に用ひる。

し

花をし 見れば 物思ひも なし。

右のやうに、「し」は意味を強めるのに用ひる。

問題 25 次の「し」を區別せよ。

(一) 咲かず なりにし 櫻。

(二) 時に 范蠡 なきにしも あらず。

問題 26 次の「し」を區別せよ。

(一) 海は 見えざりしか。

(二) 海こそ 見えざりしか。

のみ

かれのみ 喜ばざる はず なし。

残れるは これのみなり。

問題 27 右の例文を口語に改めよ。

【二】 第四類

な

ゆめ 忘るな。 いたく 罪 作りたまふな。

なこそ

な行きな。 な忘れな。

問題 28 例文で「な」及び「なこそ」の「そ」は、

動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

右のやうに、「な」「なこそ」は禁止の意味を表す。

「な」は動詞及び或る種の助動詞の終止形に附く。

但し、ラ變の動詞には、その連體形に附く。

女々しくは あるな。

「なこそ」の「そ」は、動詞及び或る種の助動詞の連用形に附く。但し、カ變・サ變の動詞には、その未然形に附く。

なこ(來)そ。 なせ(爲)そ。

ばや

行きて 取らばや。

今しばし 命 あらばや。

問題 29 右の例文で「ばや」は、どんな活用形に

附いてゐるか。

右のやうに「ばや」は自己に關した事からに就いての希望を表す。動詞及び或る種の助動詞の未然形に附く。

なむ(なん)

いま「たびの御幸待たなむ」。

雲だにも心あらなむ。

もろこしも天の下にぞありと聞く。照

る日の本を忘れざらなむ。

問題30 右の例文で「なむ(なん)」は、用言及び助動詞のどんな活用形に附いてゐるか。

右のやうに「なむ(なん)」は動詞・形容詞及び或る種の助動詞の未然形に附く。他に對してあつちへ望む意味を表す。

○この「なむ(むん)」に係りの助動詞として用ひる「なむ(なん)」と區別するために、願望の「なむ(なん)」といふことがある。

問題31 次の「なむ」を區別せよ。

(一) 歸らなむ。

いでや。目に物見せむ。

いかに。梶原殿。この川は西國一の大河ぞや。

古池や、蛙とびこむ水の音。

な

蟬の聲聞けば悲しな。

よ

少納言よ、香爐峯の雪はいかならむ。

その芽のみづ／＼しき緑よ。

右のやうに、「や」「な」「よ」は共に感動の意味を表す。

【二三】 この類の助詞は、體言や用言、その他いろいろの語に付き、主として文の終りにあつて、疑問・禁止・詠歎・感動などを表すものである。これを終助詞といふことがある。この類の助詞のうち「な」「そ」「は」「や」「なむ」「がな」「かし」などは、現代の文語では普通には用ひない。

問題32 (一) 體言又は體言に準ずるものにだけ附く

文法篇

(二) 歸りなむ。

(三) 夢のやうになむ。

がな

昔を今になすよしもがな。

右のやうに、「がな」は希望を表すもので、助詞「も」に附くことが多い。

かな

けなげなるをのこかな。

富士ひとつうづみ残して若葉かな。

あゝ、悲しきかな。

右のやうに、「かな」は體言、又は用言及び助動詞の連體形に附いて感動の意味を表す。

○この「かな」は古くは「かも」と言つた。

かし

幸あれかしと祈る。來ても見よかし。

右のやうに、「かし」は言ひ切つた形に附いて意味を強めるのに用ひる。

や

あな、嬉しや、

行けや、行け。

助詞には、どんなものがあるか。

(一) 用言や助動詞にだけ附く助詞には、ど

んなものがあるか。

問題33 次の文に誤りがあつたら正せ。

(一) 捨ておけば、ほどなく生き返らむ。

(二) かれこそ第一の物理學者なりし。

(三) 人や出づと待ち受たり。

(四) 一粒の米さへ得られざる所なり。

(五) 海巻きあぐる龍巻も、起れば起れ、聲かし。

【二三】 今まで調べて來たことによつて、文語では品詞が幾つあるかといふこと、單語には活用のあるものと無いものがあること、活用のある單語はどのやうに活用するかといふこと、單語には自立語と附屬語とがあつて、自立語と附屬語とが結びつく時どのやうな結びつき方をするかといふことなどが、わかつたはずである。

特殊の 変化の もいふ	特殊型	形容詞型	形容詞型	動詞型	種類
					語
					未然
					連用
					終止
					連體
					假定
					命令
					接續
					語
					未然
					連用
					終止
					連體
					已然
					命令
					接續

（第二卷）
口語及び文語助動詞接續表

[illegible]

[illegible]

漢文篇

一教學

送安井仲平東遊序

塩谷世弘

嘗觀於當今之學徒其在庠校孜孜勤苦者有矣及退庠則倦焉退庠而不倦者有矣及畜妻子則衰焉畜妻子而不衰者有矣及獲祿位則廢焉獲祿位而不廢者有矣逢一患嬰一災則挫焉蓋其退庠而倦者其志小者也畜妻子而衰者其器狹者也獲祿位而廢者其意滿者也逢一患嬰一災而挫者其氣不剛者也吾觀於當今之學徒衆矣其能退庠而不倦畜妻子而不衰獲祿位而不廢逢災患而不沮不挫若我安井仲平者未

多觀也。

仲平飲肥人。眇然小丈夫。狀貌陋甚。歲之甲申。來入昌平。不覺居三年。屹屹不少懈。讀書眼透。紙背識慮高卓。議論出人。意表予深。畏事之歸鄉。後歲數次。必有書至。大率激憤慨。以僻壤乏師友爲言。其藩士之來于東者。僉云。仲平少時孤介。短於容人。今則直而平。方面。恕接衆。諧和。事長有禮。閭藩敬信。至參預國事。致身奉公。所建白。皆切時務。有著績。可傳述。而講學。則益勤矣。

間從其君。祇役江戶。所居舍。湫隘樸陋。塵埃滿席。而讀書之燈。常炯炯。時從師友。出其新得。輒卽驚人。

戊戌歲。遂辭官。挈家來。就學於江戶。居無幾。而逢火。資材蕩盡。未踰年。季女又病。痘夭。仲平自降祿爵。離桑梓。孑然僑居乎三千里外。竈突未黔。累逢不慮之難。人倫之變。皆人所不能堪。而志氣不少撓。讀書日必盈寸。作

文。年可以衰。計齡垂五十。俛焉刻厲。不知頭之將蒼。此豈今世之士哉。仲平巧心計。自言吾於數術不學。而能焉。以予觀之。其稟於天者。於智特深。古人云。性敏者。多不好學。仲平以最敏之質。嗜學甚於飲食。故格致日新。識度日躋。治家善審。出入計不虞之變。待之有備。推而至邦國天下。其於利病得失。確有成算。咸可施行。謂之非今世之士。非譽也。

予賦性鈍。百事皆拙。而於算最曉。以故治產無檢。終歲栖栖。精神殆乎耗。自有妻孥。業覺日退。而事君無狀。未能涓埃益乎國。居恆觀於仲平。以自勵。然惟恐其終身不能及也。

今茲季夏。仲平欲濟刀。爾河登日光山。還軼北總。遊于水府。觀名公賢佐之所經綸。然後東入陸奥。縱覽金華松洲之勝。與衣川高館之陳蹟。壯其意氣。以爲進學之資。其驚人者。將滋不可測也。嗚呼。可畏也哉。

教條示龍場諸生

王守仁

諸生相從於此甚盛恐無能爲助也以四事相規聊以答諸生之意一曰立志二曰勤學三曰改過四曰責善其慎聽毋忽

立志

志不立天下無可成之事雖百工技藝未有不本於志者今學者曠廢職業欲歲時而百無所成皆繇於志之未立耳故立志而聖則聖矣立志而賢則賢矣志不立如無舵之舟無銜之馬漂蕩奔逸終亦何所底乎昔人有言使爲善而父母怒之兄弟怨之宗族鄉黨賤惡之如此而不爲善可也爲善則父母愛之兄弟悅之宗族鄉黨敬信之何苦而不爲善爲君子使爲惡而父母愛之兄弟悅之宗族鄉黨敬信之如此而爲惡可也爲惡則父母怒之兄弟怨之宗族鄉黨賤惡之何苦而必爲惡爲小人諸生

念之亦可以知所立志矣

勤學

已立志爲君子自當從事於學凡學之不勤必其志之尚未篤也從吾遊者不以聰慧警捷爲高而以勤謹謙抑爲上諸生試觀儕輩之中苟有虛而爲盈無而爲有諱己之不能忌人之有善自矜自是大言欺人者使其人資稟雖甚超邁儕輩之中有弗疾惡之者乎有弗鄙賤之者乎彼固將以欺人入果遂爲所欺有弗竊笑之者乎苟有謙默自持無能自處篤志力行勤學好問稱人之善而咎己之失從人之長而明己之短忠信樂易表裏一致者使其人資稟雖甚魯鈍儕輩之中有弗稱慕之者乎彼固以無能自處而不求上人入果遂以彼爲無能有弗敬尚之者乎諸生觀之亦可以知所從事於學矣

改過

夫過者自太賢所不免然不害其卒爲大賢者爲其能改也故不貴於無過而貴於能改過諸生自思平日亦有缺於廉恥忠信之行乎亦有薄於孝友之道陷於狡詐偷刻之習者乎諸生殆不至於此不幸或有之皆其不知而誤踏素無師友之講習規飭也諸生試內省萬一有近於是者固亦不可以不痛自悔咎然亦不當以此自歉遂餒於改過從善之心但能一旦脫然洗滌舊染雖昔爲寇盜今日不害爲君子矣若曰吾昔已如此今雖改過而從善將人不信我且無贖於前過反懷羞澁凝沮而甘心於汙濁終焉則吾亦絕望爾矣

責善

責善朋友之道然須忠告而善道之悉其忠愛致其婉曲使彼聞之而可從釋之而可改有所感而無所怒乃爲善耳若先暴白其過惡痛毀極詆使無所容彼將發其愧恥憤恨之心雖欲降以相從而勢有所不能是激

之而使爲惡矣故凡計人之短攻發人之陰私以沽直者皆不可以言責善雖然我以是而施於人不可也人以是而加諸我凡攻我之失者皆我師也安可以不樂受而心感之乎某於道未有所得其學幽莽耳謬爲諸生相從於此每終夜以思惡且未免況於過乎人謂事師無犯無隱而遂謂師無可諫非也諫師之道直不至於犯而婉不至於隱耳使吾而是也因得以明其是吾而非也因得以去其非蓋教學相長也諸生責善當自吾始

孝道

孝經

子曰孝子之事親也居則致其敬養則致其樂病則致其憂喪則致其哀祭則致其嚴五者備矣然後能事親事親者居上不驕爲下不亂在醜不爭居上而驕則亡爲下而亂則刑在醜而爭則兵三者不除雖日用三牲

漢文
之養猶爲不孝也。

諸家家訓

小學

漢昭烈將終，敕後主曰：勿以惡小而爲之，勿以善小而爲之。

諸葛武侯戒子書曰：君子行，靜以修身，儉以養德。非澹泊無以明志，非寧靜無以致遠。夫學須靜也，才須學也。非學無以廣才，非靜無以成學。儆慢則不能研精，險躁則不能理性。年與時馳，意與歲去，遂成枯落，悲嘆窮廬，將復何及也。

柳玢嘗戒其子弟曰：余見名門右族，莫不由祖先忠孝勤儉以成立之。莫不由子孫頑率奢傲以覆墜之。成立之難，如升天；覆墜之易，如燎毛。言之

痛心，爾宜刻骨。

范魯公戒從子杲曰：物盛則必衰，有隆還有替。速成不堅牢，亟走多顛蹶。灼灼園中花，早發還先萎。遲遲澗畔松，鬱鬱含晚翠。賦命有疾徐，青雲難力致。寄語謝諸郎，躁進徒爲耳。

范忠宣公戒子弟曰：人雖至愚，責人則明。雖有聰明，恕己則昏。爾曹但常以責人之心責己，恕己之心恕人，不患不到聖賢地位也。

勸學文

朱熹

勿謂今日不學而有來日，勿謂今年不學而有來年。
日月逝矣，歲不我延。嗚呼老矣，是誰之愆。

桂林莊雜詠示諸生

廣瀨建

休道他鄉多苦辛
同袍有友自相親
柴扉曉出霜如雪
君汲川流我拾薪

二史鑑

伯夷頌

韓愈

士之特立獨行，適於義而已，不顧人之是非，皆豪傑之士，信道篤而自知明者也。一家非之力行而不惑者寡矣。至於一國一州，非之力行而不惑者，蓋天下一人而已矣。若至於舉世非之力行而不惑者，則千百年乃一人而已耳。若伯夷者，窮天地，互萬世，而不顧者也。昭乎日月，不足為明，舉

乎泰山，不足為高，巍乎天地，不足為容也。當殷之亡，周之興，微子賢也，抱祭器而去之。武王周公，聖也，從天下之賢士，與天下之諸侯而往攻之。未嘗聞有非之者也。彼伯夷叔齊者，乃獨以為不可，殷既滅矣，天下宗周，彼二子乃獨恥食其粟，餓死而不顧，由是而言，夫豈有求而為哉？信道篤而自知明也。今世之所謂士者，一凡人譽之，則自以為有餘，一凡人沮之，則自以為不足。彼獨非聖人而自是如此。夫聖人乃萬世之標準也。予故曰：若伯夷者，特立獨行，窮天地，互萬世，而不顧者也。雖然，微二子亂臣賊子，接跡於後世矣。

任俠二則

十八史略

豫讓報仇

知伯求地於韓魏，皆與之。求於趙，不與。率韓魏之甲，以攻趙。襄子出走，晉

陽三家圍而灌之。城不浸者三板。沈窳產毒民無叛意。襄子陰與韓約共敗知伯。滅知氏而分其地。襄子漆知伯之頭以爲飲器。知伯之臣豫讓欲爲之報仇。乃詐爲刑人。挾匕首入襄子宮中塗廁。襄子如廁心動。索之獲。讓問曰。子不嘗事范中行氏乎。知伯滅之子不爲報讎。反委質於知伯。知伯死。子獨何爲報仇之深也。曰。范中行氏衆人遇我。我故衆人報之。知伯國士遇我。我故國士報之。襄子曰。義士也。舍之。謹避而已。讓漆身爲厲。吞炭爲啞。行乞於市。其妻不識也。其友譏之。曰。以子之才。臣事趙孟。必得近幸。子乃爲所欲。願不易邪。何乃自苦如此。讓曰。不可。既委質。爲臣。又求殺之。是二心也。凡吾所爲者。極難耳。然所以爲此者。將以愧天下後世爲人臣懷二心者也。襄子出。讓伏橋下。襄子馬驚。索之得讓。遂殺之。

荆軻使於秦

燕太子丹質於秦。秦王政不禮焉。怒而亡歸。怨秦欲報之。秦將軍樊於期得罪亡之。燕丹受而舍之。丹聞衛人荆軻賢。卑辭厚禮請之。秦養無不至。欲遣軻。軻請得樊將軍首及燕督亢地圖以獻秦王。丹不忍殺於期。軻自以意諷之。曰。願得將軍之首以獻秦王。必喜而見臣。臣左手把其袖。右手揕其胸。則將軍之仇報。而燕之恥雪矣。於期慨然遂自刎。丹奔往伏哭。乃以所盛其首。又嘗求天下之利匕首以藥淬之。以試人。血如綉。立死。乃裝遣軻。行至易水。歌曰。風蕭蕭兮易水寒。壯士一去兮不復還。于時白虹貫日。燕人畏之。軻至咸陽。秦王政大喜。見之。軻奉圖進。圖窮而匕首見。把王袖。批之。未及身。王驚起。絕袖。軻逐之。環柱走。秦法群臣侍殿上者不得操尺寸。兵左右以手搏之。且曰。王負劍。遂拔劍斷其左股。軻引匕首擣王不中。遂體解以徇。秦王大怒。益發兵伐燕。燕王喜斬丹以獻。後三年秦兵虜喜。遂滅燕爲郡。

易水送別

騷 賓 王

此地別燕丹，壯士髮衝冠。昔時人已沒，今日水猶寒。

(唐詩選)

蘇武持節

蒙 求

前漢蘇武字子卿杜陵人武帝時以中郎將持節使匈奴單于欲降之廼幽武置大窖中絕不飲食天雨雪武臥齧雪與旃毛相咽之數日不死匈奴以爲神乃徙武北海無人處使牧羝羝乳乃得歸武杖漢節牧羊臥起操持節旄盡落昭帝立匈奴與漢和親漢求武等匈奴詭言武死常惠教漢使者言天子射上林中得雁足有係帛書言在某澤中由是得還拜爲典屬國武留匈奴十九歲始以強壯出及還鬚髮盡白至宣帝時以武著節老

臣令朝朔望號稱祭酒年八十餘卒後圖畫於麒麟閣法其形貌署其官爵姓名

蘇 武

李 白

蘇武在匈奴十年持漢節白雁上林飛空傳一書札牧羊邊地苦落日歸心絕渴飲月窟水饑餐天上雪東還沙塞遠北憺河梁別泣把李陵衣相看淚成血

以至誠治天下

十八史略

唐太宗即位之始有上書請去佞臣者曰願陽怒以試之執理不屈者直臣也畏威顧旨者佞臣也帝曰吾自爲詐何以責臣下之直乎朕方以至誠治天下或請重法禁盜帝曰當去奢省費輕徭薄賦選用廉吏使民衣

食有餘。自不爲盜。安用重法邪。自是數年之後。路不拾遺。商旅野宿焉。帝嘗曰。君依於國。國依於民。刻民以奉君。猶割肉以充腹。腹飽而身斃。君富而國亡矣。徵嘗告帝曰。願使臣爲良臣。勿使臣爲忠臣。帝曰。忠良異乎。徵曰。稷契臯陶。君臣協心。俱享尊榮。所謂良臣。龍逢比干。而折廷爭。身誅國亡。所謂忠臣。帝悅。

三 詞 苑

五柳先生傳

陶 潛

先生不知何許人。亦不詳其姓名。宅邊有五柳樹。因以爲號焉。閑靖少言。不慕榮利。好讀書。不求甚解。每有意會。便欣然忘食。性嗜酒。家貧不能常

得。親舊知其如此。或置酒而招之。造飲輒盡。期在必醉。既醉而退。曾不吝情。去留環堵蕭然。不蔽風日。短褐穿結。簞瓢屢空。晏如也。常著文章自娛。頗示己志。忘懷得失。以此自終。贊曰。黔婁有言。不戚戚於貧賤。不汲汲於富貴。極其言。茲若人之儔乎。酣觴賦詩。以樂其志。無懷氏之民歟。葛天氏之民歟。

桃花源記

陶 潛

晉太元中。武陵人捕魚爲業。緣溪行。忘路之遠近。忽逢桃花林。夾岸數百步。中無雜樹。芳草鮮美。落英繽紛。漁人甚異之。復前行。欲窮其林。林盡。水源便得一山。山有小口。髣髴若有光。便捨船從口入。初極狹。纔通人。復行數十步。豁然開朗。土地平曠。屋舍儼然。有良田。美池。桑竹之屬。阡陌交通。雞犬相聞。其中往來種作。男女衣著。悉如外人。黃髮垂髫。並怡然自樂。見

漁人乃大驚問所從來具答之便要還家設酒殺雞作食村中聞有此人咸來問訊自云先世避秦時亂率妻子邑人來此絕境不復出焉遂與外人間隔問今是何世乃不知有漢無論魏晉此人一一為具言所聞皆歎惋餘人各復延至其家皆出酒食停數日辭去此中人語云不足為外人道也既出得其船便扶向路處處誌之及郡下詣太守說如此太守即遣人隨其往尋向所誌遂迷不復得路南陽劉子驥高尚士也聞之欣然親往未果尋病終遂無問津者

村夜

白居易

霜草蒼蒼蟲切切
村南村北行人絕
獨出門前望野田
月明蕎麥花如雪

胡笳歌送顏真卿使赴河隴

岑參

君不聞胡笳聲最悲
紫髯綠眼胡人吹
吹之一曲猶未了
愁殺樓蘭征戍兒
涼秋八月蕭關道
北風吹斷天山草
崑崙山南月欲斜
胡人向月吹胡笳
胡笳怨兮將送君
秦山遙望隴山雲
邊城夜夜多愁夢
向月胡笳誰喜聞

(唐詩選)

黃鶴樓送孟浩然之廣陵

李白

故人西辭黃鶴樓
烟花三月下揚州
孤帆遠影碧空盡
惟見長江天際流

(唐詩選)

楓橋夜泊

張繼

月落烏啼霜滿天

江村漁火對愁眠

夜半鐘聲到客船

(唐詩選)

朗詠

倭漢朗詠集

祝

謝偃

嘉辰令月歡無極

萬歲千秋樂未央

同

慶滋保胤

長生殿裏春秋富

不老門前日月遲

早春

慶滋保胤

東岸西岸之柳、遲速不同、南枝北枝之梅、開落已異、

同

都良香

氣霽風梳新柳髮

水消浪洗舊苔鬚

夏夜

紀長谷雄

空夜窓閑螢度後

深更軒白月明初

雪

白居易

雪似鷺毛飛散亂

人被鶴毳立徘徊

松

源順

十八公榮霜後露

一千年色雪中深

草

橘直幹

飄簞屢空草滋顏淵之巷

藜藿深鎖雨濕原憲之樞

山水

杜荀鶴

漁舟火影寒燒浪

驛路鈴聲夜過山

仙家

菅原文時

桃李不言春幾暮

煙霞無跡昔誰栖

菅原道真

閑居

都府樓纔看瓦色

觀音寺只聽鐘聲

大江朝綱

餞別

前途程遠馳思於雁山之暮雲後會期遙留纓於鴻臚之

曉淚

四論孟鈔

論語

曾子曰吾日三省吾身為人謀而不忠乎與朋友交言而不信乎傳不習

乎

子曰弟子入則孝出則弟謹而信汎愛衆而親仁行有餘力則以學文

有子曰信近於義言可復也恭近於禮遠恥辱也因不失其親亦可宗也

子曰君子食無求飽居無求安敏於事而慎於言就有道而正焉可謂好學也已

子曰吾十有五而志于學三十而立四十而不惑五十而知天命六十而

耳順七十而從心所欲不踰矩

子曰視其所以觀其所由察其所安人焉廋哉人焉廋哉

子曰君子周而不比小人比而不周

林放問禮之本子曰大哉問禮與其奢也寧儉喪與其易也寧戚

子入大廟每事問或曰孰謂鄒人之子知禮乎入大廟每事問子問之曰

是禮也

子貢欲去告朔之餼羊。子曰：賜也，爾愛其羊，我愛其禮。
子曰：參乎！吾道一以貫之。曾子曰：唯。子出門人問曰：何謂也？曾子曰：夫子之道，忠恕而已矣。

子曰：事父母幾諫。見志不從，又敬不違，勞而不怨。

子曰：古者言之不出，恥躬之不逮也。

子曰：甯武子，邦有道則知，邦無道則愚。其知可及也，其愚不可及也。

子曰：已矣乎！吾未見能見其過而內自訟者也。

二

哀公問：弟子孰爲好學？孔子對曰：有顏回者好學，不遷怒，不貳過，不幸短命死矣。今也則亡，未聞好學者也。

冉求曰：非不說子之道，力不足也。子曰：力不足者，中道而廢。今汝畫。

子曰：質勝文則野，文勝質則史。文質彬彬，然後君子。

子曰：知者樂水，仁者乐山。知者動，仁者靜。知者樂，仁者壽。

子曰：德之不修，學之不講，聞義不能徙，不善不能改，是吾憂也。

子曰：不憤不啓，不悱不發。舉一隅不以三隅反，則不復也。

子曰：飯疏食，飲水，曲肱而枕之，樂亦在其中矣。不義而富且貴，於我如浮雲。

子曰：我非生而知之者，好古敏以求之者也。

子曰：不語怪力亂神。

曾子曰：以能問於不能，以多問於寡，有若無，實若虛，犯而不校。昔者吾友嘗從事於斯矣。

子曰：禹吾無間然矣。非飲食而致孝乎鬼神，惡衣服而致美乎黻黻，卑宮室而盡力乎溝洫，禹吾無間然矣。

子絕四，毋意，毋必，毋固，毋我。

子畏於匡曰文王既沒文不在茲乎天之將喪斯文也後死者不得與於斯文也天之未喪斯文也匡人其如予何

顏淵喟然歎曰仰之彌高鑽之彌堅瞻之有前忽焉在後夫子循循然善誘人博我以文約我以禮欲罷不能既竭吾才如有所立卓爾雖欲從之末由也已

子曰譬如爲山未成一簣止吾止也譬如平地雖覆一簣進吾往也

子曰可與共學未可與適道可與適道未可與立可與立未可與權

孔子於鄉黨恂恂如也似不能言者其在宗廟朝廷便便言唯謹爾

三

南容三復白圭孔子以其兄之子妻之

顏淵問仁子曰克己復禮爲仁一日克己復禮天下歸仁焉爲仁由己而

由人乎哉顏淵曰請問其目子曰非禮勿視非禮勿聽非禮勿言非禮勿動顏淵曰回雖不敏請事斯語矣

子張問明子曰浸潤之譖膚受之剋不行焉可謂明也已矣浸潤之譖膚受之剋不行焉可謂遠也已矣

子曰君子成人之美不成人之惡小人反是

曾子曰君子以文會友以友輔仁

葉公語孔子曰吾黨有直躬者其父攘羊而子證之孔子曰吾黨之直者異於是父爲子隱子爲父隱直在其中矣

子貢問曰何如斯可謂之士矣子曰行己有恥使於四方不辱君命可謂之士矣曰敢問其次曰宗族稱孝焉鄉黨稱弟焉曰敢問其次曰言必信行必果硜硜然小人哉抑亦可以爲次矣曰今之從政者何如子曰噫斗筭之人何足算也

子貢問曰：鄉人皆好之，何如？子曰：未可也。鄉人皆惡之，何如？子曰：未可也。不如鄉人之善者好之，其不善者惡之。

子曰：君子易事而難說也。說之不以道，不說也；及其使人也，器之。小人難事而易說也。說之雖不以道，說也；及其使人也，求備焉。

憲問恥。子曰：邦有道，穀；邦無道，穀恥也。

子曰：有德者必有言，有言者不必有德。仁者必有勇，勇者不必有仁。

衛靈公問：陳於孔子。孔子對曰：俎豆之事，則嘗聞之矣；軍旅之事，未之學也。明日遂行。在陳絕糧，從者病，莫能興。子路愠，見曰：君子亦有窮乎？子曰：

君子固窮，小人窮斯濫矣。

子曰：可與言而不與之言，失人；不可與言而與之言，失言。知者不失人，亦不失言。

子曰：躬自厚，而薄責於人，則遠怨矣。

子曰：君子不以言舉人，不以人廢言。

四

孔子曰：益者三友，損者三友。友直，友諒，友多聞，益矣。友便辟，友善柔，友便佞，損矣。

孔子曰：益者三樂，損者三樂。樂節禮樂，樂道人之善，樂多賢友，益矣。樂驕樂，樂佚遊，樂宴樂，損矣。

孔子曰：君子有三戒。少之時，血氣未定，戒之在色；及其壯也，血氣方剛，戒之在鬥；及其老也，血氣既衰，戒之在得。

孔子曰：君子有三畏。畏天命，畏大人，畏聖人之言。小人不知天命而不畏也，狎大人，侮聖人之言。

孔子曰：生而知之者，上也；學而知之者，次也；困而學之，又其次也；困而不學，民斯為下矣。

子曰唯上知與下愚不移。

子張問仁於孔子。孔子曰能行五者於天下爲仁矣。請問之曰恭寬信敏惠恭則不侮寬則得衆信則人任焉敏則有功惠則足以使人。

子曰鄙夫可与事君也與哉其未得之也患得之既得之患失之無所不至矣。

子曰惡紫之奪朱也惡鄭聲之亂雅樂也惡利口之覆邦家者。

子貢曰君子亦有惡乎子曰有惡惡稱人之惡者惡居下流而訕上者惡勇而無禮者惡果敢而窒者曰賜也亦有惡乎惡微以爲知者惡不孫以爲勇者惡訐以爲直者。

微子去之箕子爲之奴比干諫而死孔子曰殷有三仁焉。

子張曰士見危致命見得思義祭思敬喪思哀其可已矣。

子夏曰日知其所亡月無忘其所能可謂好學也已矣。

子夏曰博學而篤志切問而近思仁在其中矣。

子夏曰小人之過也必文。

子貢曰君子之過也如日月之食焉過也人皆見之更也人皆仰之。

子曰不知命無以爲君子也不知禮無以立也不知言無以知人也。

孟子

一

孟子曰人皆有不忍人之心。先王有不忍人之心斯有不忍人之政矣。以不忍入之心行不忍人之政治天下可運之掌上。所以謂人皆有不忍人之心者今人乍見孺子將入於井皆有怵惕惻隱之心非所以內交於孺子之父母也非所以要譽於鄉黨朋友也非惡其聲而然也由是觀之無惻隱之心非人也無羞惡之心非人也無辭讓之心非人也無是非之心

非人也。惻隱之心，仁之端也；羞惡之心，義之端也；辭讓之心，禮之端也；是非之心，智之端也。人之有是四端也，猶其有四體也。有是四端而自謂不能者，自賊者也；謂其君不能者，賊其君者也。凡有四端於我者，知皆擴而充之矣。若火之始然，泉之始達，苟能充之，足以保四海；苟不充之，不足以事父母。

孟子曰：子路，人告之以有過，則喜；禹聞善言，則拜。大舜有大焉，善與人同，舍己從人，樂取於人以爲善，自耕稼陶漁以至爲帝，無非取於人者。取諸人以爲善，是與人爲善者也。故君子莫大乎與人爲善。

孟子曰：天時不如地利，地利不如人和。三里之城，七里之郭，環而攻之而不勝，夫環而攻之，必有得天時者矣，然而不勝者，是天時不如地利也；城非不高也，池非不深也，兵革非不堅利也，米粟非不多也，委而去之，是地利不如人和也。故曰：域民不以封疆之界，固國不以山谿之險，威天下不以

以兵革之利。得道者多助，失道者寡助。寡助之至，親戚畔之；多助之至，天下順之。以天下之所順，攻親戚之所畔，故君子有不戰而勝矣。

孟子曰：愛人不親，反其仁；治人不治，反其智；禮人不答，反其敬。行有不得者，皆反求諸己，其身正而天下歸之。詩云：永言配命，自求多福。

孟子曰：不仁者可與言哉？安其危而利其菑，樂其所以亡者，不仁而可與言，則何亡國敗家之有？有孺子歌曰：滄浪之水清兮，可以濯我纓；滄浪之水濁兮，可以濯我足。孔子曰：小子聽之，清斯濯纓，濁斯濯足矣，自取之也。夫人必自侮，然後人侮之；家必自毀，而後人毀之；國必自伐，而後人伐之。太甲曰：天作孽，猶可違；自作孽，不可活。此之謂也。

孟子曰：自暴者，不可與有言也；自棄者，不可與有爲也。言非禮義謂之自暴也；吾身不能居仁由義，謂之自棄也。仁人安宅也，義人正路也。曠安宅而弗居，舍正路而不由，哀哉。

孟子曰：道在爾而求諸遠事，在易而求諸難。人人親其親，長其長，而天下平。

孟子曰：存乎人者，莫良於眸子。眸子不能掩其惡，胸中正則眸子瞭焉；胸中不正則眸子眊焉。聽其言也，觀其眸子，人焉廋哉。

二

孟子曰：仁，人心也；義，人路也。舍其路而弗由，放其心而不知求，哀哉！人有雞犬放，則知求之；有放心而不知求，學問之道無他，求其放心而已矣。

孟子曰：今有無名之指，屈而不信，非疾痛害事也；如有能信之者，則不遠秦楚之路，爲指之不若人也。指不若人，則知惡之；心不若人，則不知惡之，此之謂不知類也。

孟子曰：拱把之桐梓，人苟欲生之，皆知所以養之者；至於身而不知所以養之者，豈愛身不若桐梓哉？弗思甚也。

孟子曰：有天爵者，有人爵者。仁義忠信樂善，不倦，此天爵也；公卿大夫，此人爵也。古之人，修其天爵，而人爵從之；今之人，修其天爵，以要人爵，既得人爵，而棄其天爵，則惑之甚者也，終亦必亡而已矣。

孟子曰：舜發於畎畝之中，傅說舉於版築之間，膠鬲舉於魚鹽之中，管夷吾舉於士，孫叔敖舉於海，百里奚舉於市。故天將降大任於是人也，必先苦其心志，勞其筋骨，餓其體膚，空乏其身，行拂亂其所爲，所以動心忍性，曾益其所不能。人恆過，然後能改；困於心，衡於慮，而後作；徵於色，發於聲，而後喻。入則無法家拂士，出則無敵國外患者，國恆亡。然後知生於憂患而死於安樂也。

孟子曰：人之所不學而能者，其良能也；所不慮而知者，其良知也。孩提之童，無不知愛其親也，及其長也，無不知敬其兄也。親親，仁也；敬長，義也。無他，達之天下也。

孟子曰，舜之居深山之中，與木石居，與鹿豕遊，其所以異於深山之野人者，幾希。及其聞一善言，見一善行，若決江河，沛然莫之能禦也。

孟子曰，君子有三樂，而王天下不與存焉。父母俱存，兄弟無故，一樂也。仰不愧於天，俯不作於人，二樂也。得天下英才而教育之，三樂也。君子有三樂，而王天下不與存焉。

孟子曰，雞鳴而起，孳孳爲善者，舜之徒也。雞鳴而起，孳孳爲利者，蹠之徒也。欲知舜與蹠之分，無他，利與善之間也。

孟子曰，飢者甘食，渴者甘飲，是未得飲食之正也。飢渴害之也。豈惟口腹有飢渴之害，人心亦皆有害。人能無以飢渴之害爲心害，則不及人不爲憂矣。

孟子曰，養心莫善於寡欲，其爲人也寡欲，雖有不存焉者，寡矣。其爲人也多欲，雖有存焉者，寡矣。

文部省訓
書局刊行
課寄贈

(後) ¥ .75

(11)

中等國語三

文部省